

# 「主体的、対話的で深い学び」をすべての生徒に

～ネタは「落ちこぼし」をつくらない～

2020年1月

河原 和之

## 1 はじめに

私の授業の原点は「キャラメルのミゾ」である。このネタは「砂糖が高価だった時代、企業は利潤を維持するために、砂糖価格の変動時に、ミゾの深さを調節し利潤を確保した」というものである。出典はT氏の著書であるが、某製菓メーカーに取材をしたところ、「昔はそんなこともしていたようですね。今は砂糖価格も安定しているので、機械のモデルチェンジの方に費用がかかるのでやっていません」との返答だった。

授業は公民「企業とは何か」の単元で「企業はできるだけ多くの利益（利潤）を得ることを目的に活動しています」という箇所扱う。キャラメルを持参し、ポンと口に掘り込み、「なぜ、キャラメルにはミゾがあるのだろう？」という問いは絶妙である。「ざらざらして食べやすい」「舌触りがいい」「作るときに網を使うから」と、教室は活気づく。このテーマは、すべての生徒が、早く答えを知りたいと思い、何でも自由に意見を言える“学力差”を越えた発問である。しかも、砂糖が高価だった時代背景と「利潤」の見方・考え方が育つ「スグレネタ」である。

このころ、私の授業は“騒ぐ”“邪魔をする”“エスケープする”という、とんでもない状態だった。その状態を救ってくれたのが“キャラメルのミゾ”だった。すべての生徒の目が輝き、教室に“知的な興奮”が漂っているのが実感できた。これを原点に、私の教材開発がはじまった。

だが、キャラメルのミゾは、戦争から戦後の混乱期の、砂糖やバターが超高級品だった時代の都市伝説であり、ミゾは、製造過程でのただの滑り止めだとのネット情報を得て、その後は使っていない。(アレっ!)「キャラメルのミゾ」には、子どもたちが“社会科好き”になり、「見方・考え方」を鍛え、「深い学び」へと誘う教材(ネタ)の神髄がある。それでは、“スグレネタ”というのは、どんなネタなのか?

## 2 切り口は単純だが、深い学びのあるネタ～「犬税」から主権者育成へ～

「犬税をかけようとして断念した自治体が大阪にある。何市か？」答えは「泉佐野市」である。「へっ！犬に税なんて」「何で？知りたい！」となかなか面白い。ドイツでは「犬保有税」が導入されている。理由は「フンを処理をする手数料への

負担」という考えからである。「ふーん（笑）なるほど」である。

それでは、「泉佐野市は、なぜ断念したのか?」「税金を払ったのだからフンの処理をしなくてもいいって思ってしまうので逆効果だ」等。この考えは「行動経済学」の考え方である。「アダム・スミス」の税金の一般原則からすると次のことが課題である。

「公平の原則」なぜ犬だけなのか

「明確の原則」対象となる犬をもれなく把握できるか

「最小徴税量の原則」徴収よりの徴税コストのほうが多額になる

「犬税」から「税金の一般原則」という「深い学び」が可能なネタである。

「税を取られる」ではなく「税を納める」という観点から、「税の使途」を考えることで、政治に関心をもつ“主権者意識”を育成したい。

### 3 はやくわかりたい!解決したいと思うネタ～「一休さん」から「武家政権の確立」まで～

「一休さんというのは、“一休み”が語源である～」NHKテレビ「チョコちゃんに叱られる」的導入である。天皇に対しても“溜口”の映像を紹介する。「一休さんのお父さんはどんな身分なの?」と問い、「天皇」「貴族」「武士」「農民」から選択する。一休の顔や「とんち話」などを紹介し、もったいぶっていると「先生!早く教えて!」の声。これが、このネタの「スグレ」ている所以だ。返答に「天皇」（後小松天皇）が圧倒的に少ない「意外性」もあり、「へっ!どうして?」とテンションが上がる。

「一休さんは天皇の子どもなのになぜ安徳寺に一人で預けられたの?」と発問。「修行」「家庭問題」など、生徒から「お母さんはどんな人?」と。母は「藤原氏の高官の娘だった」と知ると、ますます興味深々。

一休さんの誕生は1334年、南北朝の対立が始まる時代である。父、後小松天皇は「北朝方」、母は「南朝方」、この対立が家庭に波紋をもたらし、一休は、幼いころ、安徳寺で一時期を過ごすことになる。教室の静寂とともに「南北朝の内乱」が一休というキーワードを介して定着する。

『なぜ60年間も南北朝は統一されなかったのか?』という課題は「深い学び」につながる。ただ、「スモールステップ」の問いが不可欠だ。『南朝を倒して天皇家を一本化すると天皇の力はどうなるか?』『強まる』『朝廷が南北に分裂していることは幕府にとっては望ましいか?』『望ましい』つまり、幕府は南朝の力を恐れたのではなく、むしろ北朝を牽制し、支

配が容易な状態をつくったのである。では、『なぜ、義満になり南北朝が統一されたのか?』単純に、義満が朝廷を完全に掌握したからであろう。これ以降、明治維新まで「天皇」の記述は教科書からは消える。つまり、義満以降、第二期武家政権がはじまるのである。「一休さん」の時代・・・武家政権の“一休みの時代”とも定義できる。「一休さん」は「南北朝時代」の時代像を「深める」「スグレネタ」である。

#### 4 日常生活から科学の世界にせまるネタ～「ハンバーガー」から見える社会と歴史～

「マクドナルドのパンはどこメーカーか?」答えは「フジパン」だが、マクドナルドとフジパンは、お互い持ち株関係にあるからである。同様に甲子園球場で主に販売されているビールはアサヒなのは「阪神電車」と「アサヒビール」が同じ元「住友」系列だったからである。「みえるもの」から「みえないもの」を探究するのが、社会科教育の基本であり、この授業は「へっ! そうなんだ! なるほど」という驚きとともに「知識」や「見方・考え方」が定着する。

「ハンバーガー」は、アメリカで「ハンバーグ」を販売していたところ、包み紙がなくなり、たまたまあったパンで包んだことが、そのはじまりとされている。それでは「ハンバーグ」は? ドイツの都市である「ハンブルグ」に由来するが、もとは、遊牧民族のチンギス=ハンが建国した「モンゴル帝国」のタルタルステーキに起源がある。生の牛肉や馬肉をみじん切りにし、味付け、タマネギ、ニンニクなどの薬味と卵黄を添えた料理である。つまり、「モンゴル帝国」は現在のドイツ(ビザンツ帝国) 近辺まで勢力を広げていたことがわかる。同様に、モンゴルの生肉を食べる文化は、支配をうけた朝鮮半島にも浸透し、生の肉を細切りにする「ユッケ」になっている。「ハンバーガー」という子どもたちの「日常」から公民学習だけではなく、歴史学習においても「深い学び」が可能である。

#### 5 ワクワク感を持ち、事実や背景、そして本質につながるネタ～「特別教室」は国策によってつくられた～

「家庭科室」「音楽室」「理科室」「図書室」などの特別教室が作られた時期を考えることから、時代背景や教育状況が垣間見える。「学校の特別教室はいつつくられたのか?」ヒントを提示し「古い順に並べてみよう」と、グループ討議をさせるが完答は皆無だ。

- ① 1880年 家庭科室一学制は発足したが、女子の就学率が低く、それをアップするために裁縫を教える家庭科室が設置された
- ② 1910年 音楽室一二つの戦争が終わったが、戦争で勝利するためには、唱歌を通じて国民を鼓舞する必要性があったから
- ③ 1915年 理科室一第一次世界大戦はいろんな武器が作られ、ある意味、科学戦争であった。戦争にむけた科学技術のために理科室が設置された
- ④ 1946年 図書室一日本が軍国主義になったのは、多角的なものの見方ができなかったからあるという、アメリカGH

Qの認識のもと、図書室が設置された。

本テーマは、興味関心を喚起しつつ「歴史を大観」する授業に適している。「図書室」に行ったおりに、隣にいる人に、ちょっと“うんちく”を言いたくなるそんなネタである。

## 6 矛盾や対立のあるネタ～「緯度が高いほど気温が高い?」「酒ばかり飲んで大金持ち?」～

「緯度が高いほど気温が低い」のが「常識」である。この「常識」が揺れたとき、意欲は高まる。「スウェーデンのキルナ炭鉱の鉄は、冬場は、どこから輸出するのか?」「キルナ炭鉱の鉄は、夏は、スウェーデンのルレオ港から輸出するが、北緯65度にあり冬は海が凍るので、さらに北にあるノルウェーのナルヴック港から輸出される?????」「……」

「ノルウェーの沿岸は北大西洋海流（暖流）が流れているので凍らない」「う～ん！なるほど!」と「矛盾」が解決するだけではなく、「海流」（海）の果たす役割や「見方・考え方」が育つ、なかなかの“スグレネタ”である。

日本の「黒潮」は暖流、「親潮」は寒流。なぜ「黒」「親」なのか?「黒」は日本海流の「色」からその由来がある。「親」は「プランクトンなどの栄養分が豊富で魚類を育てる”親“のような役割を果たしているからだ。「う～ん！なるほど!」か。

第一次世界大戦後、ドイツではハイパーインフレになった。「兄は一生懸命、貯金していたが、数年たつと貧乏に。借金してはビールをため込み、毎日飲んでいた弟が大金持ちになった。なぜか?」という問いも、「矛盾」「対立」を生むテーマである。「通貨の価値がなくなり、兄の預金はタダ同然になった。弟の多額の借金は、高価になったビールを売ることでより返済できた」のである。

以上の「矛盾と対立」のあるテーマは、「対話的」な学びにも有効である。なぜなら、「へっ!」「どうして?」「なぜ?」と「常識」が揺れ、「早く解決したい」と対話が促進されるからである。

## 7 驚きや葛藤のあるネタ～「オリンピック」「大相撲」ネタから「社会科」へ～

前項の「矛盾」とも類似しているが、「へっ!」「ビックリ!」というネタである。1964年の東京オリンピック、10月10日の開会式のときは「北ローデシア」という国が、24日の閉会式では「ザンビア」と国名が変わった。なぜか?1960年代は“アフリカの年”と言われ、多くのアフリカ諸国が独立した。教科書には「太字」で書かれており、とりわけ“面白く”ない單元だが、オリンピックを介して学ぶと、なかなか楽しい。

「成果主義」と「年功序列型賃金」の選択を問う授業である。「プロスポーツは、成果主義が大部分だが、年功序列型賃金のスポーツは?」答えは大相撲である。大相撲の力士は、十両になるまでは、いっさい賃金はもらえないが、十両になると、好成績を上げると加算され、負け越しても減額されない年功序列賃金である。また、力士を辞めると年寄になり指

導者として、日本相撲協会に残れ、65歳の定年まで勤められる。具体的な仕事は、相撲部屋を開いたり、協会の役人になる力士もいるが少数である。平年寄という普通の人は大相撲会場の警備の仕事をする。平均の年間所得は、・・・なんと、3億6000万円といわれている。“驚き”だ。「高給取りでないと、誰も相撲界にはいかない。なぜ?」と問う。「太りすぎて再就職は無理」「サラリーマンには向いていない」「コミュニケーションが苦手な人が多い」「中卒の人が多く企業に雇用されにくい」「国技だから」などなど多様な意見が噴出。その後の「成果主義か年功序列型賃金か?」の討論は、この導入の”流れ“にのり一気に盛り上がる。

「年功序列型賃金」は「大相撲」を介して、楽しく、イメージ豊かに学ぶことができる。楽しくわかる「驚き」のある題材で「習得」すると「知識」として定着しやすい。

## 8 思考や判断が揺れるネタ～兄弟げんかではなく「武家社会」をめぐる対立～

「消費税の是非」「夫婦別姓の是非」「成果主義か年功序列型賃金か」など「公民」の授業では定番だが、歴史の授業においても「縄文と弥生、どちらの生活がいいか?」「信長は好きか嫌い?」「秀吉は農民の味方か?」などのテーマがある。

「源平合戦で頑張った弟義経を兄頼朝はなぜ殺害したのか?」「源平合戦での義経の頑張り」を時系列で紹介する。その後、上記「発問」は効果的である。義経が頼朝に腰越から送った嘆願書には「・・・朝廷から五位尉という高い位をいただいた」というくだりがある。これに、頼朝は怒りをあらわにする。「なぜ怒ったのか?」という問いは「思考・判断」が揺れる発問である。「自分だけいい目をした」「なんで弟だけ」という感情的な意見が主流を占める。時代は天皇、貴族中心の時代から、武士が中心の“御家人オンリー時代”つまり、「土地」を仲立ちとした“御恩”と“奉公”の封建時代に変化していったのである。それを見抜けず、貴族政治の高官に固執した義経と、新しい武士の時代の到来を予見していた頼朝の対比から時代が大観できる。背景には、京都に住んでいた義経と、伊豆に流され地方の武士の願いを感じ取っていた頼朝との違いがある。

また、頼朝は、弟を探し出すため、朝廷に「守護」「地頭」の設置を認めさせ、弟をかくまったという理由で「奥州藤原氏」を滅亡させたのも、実にしたたかだ。こうして武家社会が確立していく。

ネタは、単なる“雑学”や“エピソード”ではなく、「授業のねらい」に沿ったものでなくてはならない。追究することから「知識」が習得し、「見方・考え方」「思考力・判断力」が育成することが重要である。

## 9 「切実性」「当事者性」のあるネタ～「SDGs」の可能性～

“待ったなし”の「少子高齢社会の進行」「地球温暖化」にもかかわらず、授業では「切実性」がなく「当事者性」に課題がある。

「10年後には、ハンバーガー店がなくなるかも・・・」というフレーズは、「切実性」が伝わってくるのではないだろうか？「切実性」をキーワードに、「恐るべき日本の未来図を時系列に沿って、かつ体系的に解き明かす」（河合雅司『未来の年表』（講談社現代新書）書籍が出版されベストセラーになった。この本から、いくつか象徴的な事項をチョイスし＜クイズ化＞してみた。

2020年 「(1) できる女性」が激減。女性の2人に1人が50歳以上に。

2021年 「(2) による離職が大量発生」

2022年 「(3) 暮らし社会」が本格化

2024年 (4) 人に1人が65歳以上の「超・高齢者大国」へ 国民の6人に1人が75歳以上

2026年 (5) 患者が700万人規模に

2030年 地方からデパート、銀行、老人ホームが消える

2033年 全国の住宅の3戸に1戸が (6) になる

2035年 「未婚大国」が誕生 男性の (7) 人に1人、女性の (8) 人に1人が生涯未婚

2042年 高齢者人口が約 (9) 万人とピークに

<答え>①出産②介護③一人④3⑤認知症⑥空き家⑦3⑧5⑨4

\*ペア学習で『いちばんたいへんなのは何か?』を交流する。

「僕たちも介護離職の可能性がある」「高齢者の一人暮らしが増えるとたいへん」「認知症患者が700万人になったら・・・」

「もっともたいへんなのは、デパート、スーパー、銀行そしてマクドナルドも地方からなくなるってことだ・・・そして人がいなくなる」

日本が少子高齢社会にあることは、誰もが知る「常識」である。しかし、大切なことは、これから起こること（起こっている）を「自分ごと」として考え、「未来の日本人」が日本列島にどこに暮らし、どんな生活をしているのかを知ることである。そして、今後の取り組み次第で「未来」は書き換えは可能であろう。

「地球温暖化」については、「海水温」の上昇による、「台風」や「豪雨」被害の状況は、「切実性」そのものである。最近、列島近海の海水温27度以上の海域で勢力をあげ、日本列島に近づくほど、勢力を強め上陸してくる。

電車で以下のようなSDGsに着目した「吊り広告」を見かけた。



このまま「温暖化」を放置すると、2100年の平均気温は現在より4.5度上昇すると言われている。「学校」「家庭」「遊び」「農水産物」の4つと、それ以外2つのキーワードを自分で設定し、「2100年の生活」を想定し、思いつくまま書く<マンダラチャート>による授業をおこなった。

《代表的事例》プラスは「旅行」「災害」

学校—「通学バス」「通信教育」 家庭—「自宅仕事」「冷蔵庫が変化」

遊び—「公園消滅」「花見が連休」 農水産物—「室内栽培」「主食変化」

旅行—「正月に紅葉」「年中海水浴」 災害—「年中台風」「雪崩」

わずか15分程度であったが、6項目に30程度のキーワードを書く生徒もいた。記入後、グループで交流し、情報を共有することで、さらに学びは深まる。最後に「2100年、私の天気予報」という題で作文を書く。(紙数の関係で略)「地球温暖化」についても誰もが知る「常識」である。学びのキーワードは「切実性」「当事者性」に加え「加害性」が不可欠だ。地球上に住む約800万種の動植物のうち100万種が絶滅の危機にあると言われている。「命のにぎわい」が、新参者の「人間」により侵されているのである。ニューヨークのある動物園の展示檻の中には鏡があった。見物する本人が写っている。その説明文には以下のように書かれてあった。

## 「他の動物を絶滅させたことのある唯一の動物」

1992年カナダ、セヴァンさんが、リオデジャネイロの「地球環境サミット」で（当時12歳）語った次の言葉が印象的である。「オゾン層にあいた穴をどうふさぐのか、あなたは知らないでしょう。絶滅した動物をどう生き返させるのか、あなたは知らないでしょう。どう直すのか分からないものを壊し続けるのはやめてください」

## 地球からのHELPの声は、あなたに届いていますか？

「SDGs」（持続可能な開発目標）が注目されている。社会科教育を「持続可能」な観点から再考する機会になることはいうまでもない。それは「未来の目線で今を見る」「誰も置き去りにしない世界の確立」「社会の多くの課題は、相互に絡みあって、それぞれが関連し合っている」ことであり、国際関係とは国家と国家が「衝突する空間」に過ぎないというリアリズムを「国境を越えて協力」することへのメッセージ性がある。そして、「行動化」がキーワードである。君の「好きなこと」が、「世界の課題」と繋がっている、「自分のやりたいこと」が、「みんなのため」にもなる、「小さな一歩が地球の未来をつくる」そんな授業の可能性はある。

## 10 おわりに～学習指導要領と「主体的、対話的で深い学び」～

学習指導要領解説には「主体的、対話的で深い学び」について以下のような記述（要旨）がある。

- ア これまで取り組まれてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入することではない
- イ 授業の方法や技術の改善のみを意図しない
- ウ 通常行われている学習活動（言語活動、問題解決的な学習）の質を向上させる
- エ グループなどで対話する場面や、児童生徒が考える場面と教師が教える場面の組み立てが大切である
- オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせるが重要である

そして、カには「**基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その確実な習得を図ることを重視すること**」とあり、「**重視**」というキーワードは、この項のみである。

学習指導要領に対して、「知識」軽視ではないか、「方法論」（ジグソー学習など）のみが先行し、「課題や内容」が重視されて



いないとの批判がある。しかし、解説を読むかぎり、そうでないことがわかる。

しかし、「落ちこぼれ」「落ちこぼし」「分数ができない大学生」「学びからの逃走」など、いわゆる「できない子」への“眼差し”、“教師の責任を問う”キーワードが最近、耳にすることが少なくなってきた。

「見方・考え方」「思考力・判断力・表現力」が重視されるあまり、「そんな力」とは“無縁”な、いわゆる「できない子」が放置されている。学習指導要領の「重視」する箇所を再度提示する。

**「習得に課題がある場合には、その確実な習得を図ることを重視する」**

**「主体的、対話的で深い学び」とは、課題のある子どもにも視点を当てつつ、教師の教える場面と、対話的な場面を組み立て、**

**「知識」を習得し、「問題解決的な学習」等を通して、「見方・考え方」を育成することであるといえよう。**

<参考文献>

河原和之『100万人が受けたい！見方・考え方を鍛える「中学地理」(歴史)(公民)大人もハマる授業ネタ』(明治図書)

本郷和人「権力の日本史」(文春新書)

河合雅司『未来の年表』(講談社現代新書)

千葉保『はじまりをたどる歴史の授業』(太郎次郎社エディタス)

(未定稿 河原和之 2020年1月)